



キャッシュレス時報

CASHLESS JIHO

長内 智

(株)大和総研
金融調査部
主任研究員

第21回 ゆうちょ銀行の硬貨取扱手数料の有料化

現金利用に手数料という逆風

●硬貨の「駆け込み入金」が発生

ゆうちょ銀行は、2022年1月17日、これまで無料であった硬貨の入金や払戻サービスを有料化しました。今回の有料化に関しては、すでに2021年7月2日に公表されていたものの、直前になって気づいた人も多く、一部で硬貨の「駆け込み入金」の動きが見られました。

新たな入金手数料を確認すると、郵便局の対応窓口で入金する場合、硬貨50枚までは無料、51枚以上が有料化されています。ATMで入金する場合は、硬貨1枚から手数料がかかります。また、入金する硬貨の金額ではなく、硬貨の枚数に応じて手数料が加算される仕組みである点には留意が必要です(図表参照)。

【図表】ゆうちょ銀行の硬貨入金手数料

窓口	ATM
【1～50枚】 無料	【1～25枚】 110円
【51～100枚】 550円	【26～50枚】 220円
【101～500枚】 825円	【51～100枚】 330円
【501～1,000枚】 1,100円	※1回最大100枚まで ※1回の手続ごとに料 金が発生
【1,001枚以上】 500枚ごとに550円加算	

(出所) ゆうちょ銀行「ゆうちょ料金新設・改定のお知らせ」より大和総研作成

●厳しい収益環境が有料化の背景

近年、大手銀行や地方銀行において硬貨の取扱手数料の導入が相次いでおり、今回のゆうちょ銀行の有料化は、そうした他行の動向に追随したものと捉えることができます。

それでは、なぜ銀行は手数料の新設を進めてきたのでしょうか。この背景には、長期的な超低金利下で貸出ビジネスの利ざやが縮小し、収益環境が非常に厳しいという実情があります。

硬貨の取扱サービスには、保管・輸送費や両替機の保守・管理費、事務の人件費といったコストがかかります。かつて銀行は、その費用を貸出収益などで賄えたものの、足元で収益環境が厳しさを増す中、そうした余力がなくなっています。そこで、今後も硬貨の取扱サービスを安定的に提供するために必要な対価として、手数料を徴収するようになったのです。

●現金による払込サービスにも加算料金

今回、ゆうちょ銀行は、現金で各種払込サービスを行う際に加算料金も新設しました。ここで、消費者の手数料負担が増加するケースについて簡単に確認しておきましょう。

加算料金は、税公金の払込を除く①通常払込、②ゆうちょPay-easy(ペイジー)サービス、③電信払込に対して、1件当たり110円が課されます。なお、加算料金が課されるのは現金を利用した場合のみのため、ゆうちょ銀行の通帳又はキャッシュカードを利用して口座支払にすることで、加算料金を回避できます。



キャッシュレス対応の重要度が増す

●無料になる方法を事前にチェック

硬貨入金手数料の金額自体は、そこまで高くないようにも感じます。しかし、少額の硬貨の場合、手数料の負担割合が非常に大きくなる可能性がある点に注意が必要です。極端な例として、ゆうちょ銀行の窓口で1円玉501枚(501円)を入金すると、その2倍を超える1,100円の手数料が発生します。10円玉501枚(5,010円)の場合でも、手数料率は約22%となります。

こうした手数料負担を考慮すると、実際に大量の硬貨を入金する場合には、少し面倒であるものの、事前に手数料が無料となる方法を確認しておくのがよいと思います。

例えば、硬貨が50枚以内の場合には、郵便局の窓口に行けば、無料で入金可能です。ゆうちょ銀行の窓口は、全国津々浦々に多数存在しているため、通常、そう遠くない場所で見つけられるでしょう。また、現在のところ、大手銀行はATMで硬貨を入金する際の手数料を無料としています。そのため、大手銀行の口座を持っている人は、硬貨対応ATMで入金することも選択肢となります。

●ペナルティと適正な対価という両面

銀行の硬貨取扱手数料の導入については、これまで無料であった硬貨の利用に対して、ペナルティが課せられたように感じる人がいるかもしれません。他方、銀行側からは、実質的に赤字続きであった硬貨の取扱サービスを、今後も安定的に提供するために必要で適正な対価という見方もできます。

銀行の貸出ビジネスの収益環境は当面厳しい状況が続く見込みであり、今後も硬貨をはじめ現金の利用に際して手数料を新設したり、引き上げたりする動きが広がる可能性があります。こうした中、消費者は、不要な現金を手元に置かず、キャッシュレス化を可能な範囲で進めることが一層重要になると考えられます。

貯金箱から貯金アプリの時代へ

●子どもが貯めたお金にも手数料

自分が子どもの頃、お金(硬貨)を貯金箱に入れて少しずつ増やしていくという経験をした人は非常に多いでしょう。そして、貯金箱がいっぱいになったら、まとめて郵便局や銀行に入金していたと思います。

子どもが貯金箱を使うことには、お金の管理能力や金銭感覚を身につけるといった効果が期待されます。その点で、人生における金融教育のまさに第一歩といえます。

将来的に硬貨の取扱手数料が厳しくなると、子どもがせっかく貯めたお金から、結構な手数料を徴収されてしまう可能性があります。それは、一見不幸なことかもしれませんが、お金に関わる手数料の存在を学び、その手数料が不要なキャッシュレス決済・手続について考える機会と捉えれば、金融教育という面でメリットもあると思います。

●海外で進むお小遣いのキャッシュレス化

スウェーデンなど海外のキャッシュレス先進国では、現金を利用できない店舗が増加して、それらの国々では現金が徐々に不便な支払手段となっています。こうした中、子どものお小遣いを現金でなく、送金アプリで送るといったケースが増えているのです。さらに近年、子ども向けのお金の管理アプリ(貯金アプリ)が相次いで登場している点も注目されます。

日本では、お小遣いを送金することに対して、まだ抵抗感が強いように思われます。他方、子ども向けのお金の管理アプリに対しては、少しずつ関心が高まっており、それを取り上げる記事やSNSの投稿が増えています。これらのアプリの中には、お小遣いやお年玉だけでなく、お手伝いをする事で得たお金を管理する機能が備わっているものもあります。

今後、子どもは貯金箱でなく、貯金アプリを通じて、お金を管理し、金銭感覚を身につけるという時代がくるかもしれません。